

# 裏方を主役に。

# 伊勢型紙の未来を照らす星を目指して。

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりの挑戦に「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)・アート・プロデューサー(下川一哉氏(意と匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主権のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨春夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月24日、プレゼンテーションにて

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMARIAクリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(MREALAGE代表取締役社長・デザイナー)、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター)・プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。

LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

三重県選出の匠、伊勢型紙彫師の那須恵子さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

### 百年先を見据え 地域や業界と連携する 取り組み始動

小さい頃から絵を描くことが好きだったという那須さんは、デザイン科の高校を卒業後印刷会社に就職し、ペーパーイラストで情報誌の表紙を手掛けていた。やりがいは感じていたものの「時間に縛られず好きな手作業を突き詰められる仕事があった」。それなら伝統工芸の仕事だ」と会社を退社。東京や京都を訪れ、伝統工芸の職人に話を聞いていたなか、伊勢型紙と出会う。極小の彫りと芸術性の高い文様に目を奪われ、那須さんの琴線に触れた。「自分もこの技術を手に入れたい」。すぐに弟子入り志願に動くが「伊勢型紙では生活がなりたない」と断られ続ける。しかし那須さんの思いは強く、その熱意にほだされた生田嘉範氏は弟子入りを快諾した。わずかに1ミリ以下を彫る緻密で繊細な作業に、イメージしている動きが手に伝わらず苦労した。日々研鑽し技術を磨く一方で伊勢型紙の需要を高める術を模索した。

伊勢型紙の歴史は古く、およそ千年前には現在の鈴鹿市白子地区で型紙業が始められていたと言われている。江戸時代には同地域が紀州藩の天領となり、紀州徳川家の保護を受け、全国に伊勢型紙が知れわたるようになった。型紙の90%以上が同地域で生産されるなど一大生産地として活気づいていた。しかし



エリア・コンサルティングにて

時代の変化により昭和四十年頃をピークに需要は減少の一途をたどり、一時は三百人近くいた職人は現在二十人程に減少し、高齢化も伴い技術の伝承が危ぶまれている。

こうした状況のなか那須さんは、同じ悩みを抱える若手職人の仲間らとワークショップなど魅力を伝える活動を積極的に実施。地道な普及活動により、職人となり九年目を迎える現在では得意先も増え、型紙を納品できるところにまでになった。

「百年先も染め手を支え、型紙で心を伝える」を掲げている那須さん。伊勢型紙には、地域を元気にできる魅力と可能性があると今回のプロジェクトに参加した。「星月夜」で型紙の可能性を示し、地域・業界・ブランド・メディアなどさまざまな立場の方と連携して伊勢型紙の事例を作っていく、地域と業界を盛り上げていきたい」と話す。百年先を見据えた取り組みが、スタートした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。



バイヤーに説明する那須さん

## 広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー 小山薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



職人を支える道具

## 影の工芸品伊勢型紙のプロダクト完成

那須 恵子 三重 / 伊勢型紙彫師



微細な文様を彫る那須さん

伊勢型紙は文様を反物に染めるための染色道具で、加工した和紙に彫刻刀や錐で彫り抜いたものだ。江戸時代には小紋の流行により全国的に普及したが、時代の変化により次第に遠い存在になっていった。

那須さんは、伊勢型紙業界を盛り上げるプロダクト作りに挑戦した。型紙の美しさを最大限に活かせるプロダクトをと考え導き出した答えがジュエリーだ。そこでジュエリーに精通する大阪の匠・小尾野香織さんに知見を借り開発が始まった。華やかさを演出するため西陣織引箔の伝統工芸士村田紘平氏の協力のもと型紙の表面を箔で彩り、透明なアクリルで挟み込むことに決め試作を進めるが、彫り上げる途中で箔が欠けたり、1ミリ以下で彫られた型紙を土台から切り離す過程で切れてしまったりと困難を極める。そんな時、隣で寡黙に型紙を彫る生田氏を見て「妥協はできない」と奮起し、並々ならぬ集中力で彫り上げた。

エリア・コンサルティングでは生駒氏から「もっと伊勢型紙

て業界初の他分野のプロと取り組んだ完成度の高い伊勢型紙ジュエリーを作り上げた。

商品の名前は「星月夜」(ホシヅクヨ)。深い夜の中にある伊勢型紙を明るく照らす星となるよう願いを込め名付けた。指輪とピアスは三種類ずつ、ネックレスは二種類で、型紙らしい古典文様の「錐小紋」「麻の葉」「七宝」を再構成したデザインを採用した。錐小紋は白の文様を夜空の星雲に見立ててアレンジしたことで華やかなデザインとなり、パーティーシーンなどで重宝しそう。麻の葉は、百年前の着物の図案からリデザインし星座をイメージしたもので、どこか涼やかで浴衣にあいそうだ。七宝はエジプトでも使用されてきた文様で、レースの様な繊細な曲線が目を引きジュエリーだ。三柄とも型染めし、染色道具として伝える為のジュエリー袋も制作した。

今回のプロジェクトに参加して「多くの匠と出会い刺激となった。将来はコラボレーションしてみたい」と話す那須さん。今後の幅広い活躍が期待される。



完成プロダクト「星月夜」



那須 恵子 三重 / 伊勢型紙彫師

1982年岐阜県岐阜市生まれ。印刷会社を退社した27歳の時、手先を使う一生の仕事を探途中で伊勢型紙と出会い、修行のため三重県に移住。突彫りの職人である生田嘉範氏に師事。伝統の技を尊び、自らの技術を磨くとともに、伊勢型紙の普及、振興のための活動にも精力的に取り組んでいる。また三重県を中心に活動している伝統工芸を担う若手職人グループ「常若」に所属し、伝統工芸の魅力を発信している。

